



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association

2012.1 第46号



提◆言

食肉の安全と獣医師の役目

全農畜産サービス株式会社種豚事業部長 鷺谷 敏一

年頭に当たりご挨拶申し上げます。昨年は、震災をはじめいろいろなことがありました。皆様のご健勝を願ってやみません。

さて、畜産業において、獣医師の仕事が不可欠であることは誰でもご承知でしょう。わがSPF豚業界にも獣医師は大勢携わっています。ところで、獣医学の一分野に獣医公衆衛生学があり、獣医学生は必ず学びます。食品等を通した「人の衛生」について、われわれ獣医師の任務でもあるのです。このことが獣医師以外には意外と知られず、また養豚現場の獣医師もすっかり忘れてしまっているのが現状です。そこで、食肉の安全と獣医師の役目について考えてみたいと思います。

昨年、ユッケの腸管出血性大腸菌、馬刺しの住肉胞子虫、生ハムのリステリア菌など、世間に衝撃を与え、畜産物の消費に大きくマイナスとなる事件・事故がありました。基本的に、畜肉を生で食するのは、なんらかのリスクがあるということです。豚肉を食べる歴史は、イノシシの時代から含めれば、何千年にもなるでしょう。古いことはわかりませんが、大体加熱して食べるのが定着していることから、やはり人類の歴史の中で生食で痛い目にあってきたのではないのでしょうか。

では、どんな健康被害があったのでしょうか。私の子供のころの愛読書『保健と人体の凶鑑』（昭和39年、小学館）によれば、豚肉の生食によって人にうつる寄生虫として、有鉤条虫（ゆうこうじょうちゅう いわゆるサナダムシ）が載っています。ちなみに「豚にツノあり、牛にツノなし」といって、牛には無鉤条虫（むこうじょうちゅう）というのが寄生しており、獣医師国家試験の前に覚えた学生も多いと思います。

有鉤条虫の怖いところは、豚肉に潜んでいたサナダムシの幼虫が人の腸内で親虫に育つだけでなく、その

親虫が生んだ卵が人の口に入ると、こんどはその幼虫が人の筋肉や臓器に入り込んで暴れることです。

次に、トキソプラズマがありました。これは昭和41年に朝日新聞がスクープし、国会でもとりあげられ、一般消費者に大きな不安を引き起こし、養豚食肉業界でも対策に大変苦勞されたそうです（『高崎ハム30年の歩み』昭和44年）。豚肉はよく加熱して食べるというのはこれらの教訓から定着しているのだと思います。

これらの病原体は、養豚生産の近代化と関係者の努力により、SPF豚農場はもちろん、日本の多くの養豚農場では撲滅されています。しかし、だからといって豚肉を生食しても安全、とはいえません。

豚丹毒、サルモネラ、E型肝炎など、豚から人へ感染するおそれのある疾病はいろいろあります。一昨年は豚インフルエンザが話題になりました。これらについては、残念ながら日本の養豚場から撲滅されてはいません。もちろん、日本では食肉の生体検査・解体前検査・解体後検査が、厳しい監視のもとに行われており、これらの疾病に感染し発病した豚が食肉として出回ることはまずないでしょう。しかし、無症状で保菌（例：サルモネラ）している豚がと畜され、病原体が枝肉に付着する可能性はあります。プロイラーでのカンピロバクターや、牛肉での大腸菌O-111などは、どこかで肉に付着してしまったのが現実です。ですから、豚肉も加熱して摂食するのが原則と考えます。

養豚に関わる獣医師は、農場からこれらの病原体を撲滅するための衛生対策を推進するのはもちろんですが、食肉衛生の正しい知識を伝え、生産者と消費者をつなぐことも重要な使命であるといえます。

畜産物による人の健康被害を未然に防ぎ、安定した消費の推進に努めていきましょう。

S P F 豚セミナーを 開催

災害時の農場防疫・防災をテーマに 基調講演、パネルディスカッション など



昨年11月15日、東京都千代田区のKKRホテル東京において、今年度のSPF豚セミナーが開催されました。参加者は約100名でした。

今回は東日本大震災をはじめとする歴史的災害が相次いだことを受け、震災の被害を受けられた方々に体験をお話いただきました。

北島克好・協会会長の挨拶のあと、藤田世秀・協会専務理事によるCM認定農場の生産成績年次報告があり、続いて秦政弘・協会副会長による基調講演「災害における防疫・防災のあり方」が行なわれました。

秦副会長が社長を務める(株)サンエスブリーディングのGP農場であるサンエス丸森農場は福島県にあり、震災により土砂崩れ、敷地内の地盤沈下・亀裂、給水管・排水路の破損などさまざまな被害がありました。幸い飼料タンクや搬送ラインの破損はほとんどありませんでした。ただし、停電が6日間続き電話・パソコンは使用できずラジオも電波障害に。自家発電によるテレビからの情報収集が頼りでした。飼料は関係者の努力でなんとか確保できたそうです。

1時間を超える大変中身のある講演で、秦さんは「想像を超える災害の場合、真っ先に従業員の安全確認、その後場内の状況確認、従業員の家族の安全確認を行い、業務に専念してもらえる環境作りが重要。当社では、労働災害を防ぐため日頃から日々の健康管理、互いに行動が確認できる体制での（2人以上）業務遂行や機械の取り扱い、薬剤使用の際のゴーグル・マスクの着用を義務付けている。また、地域の災害情報も絶えず確認しておく必要がある」。

「備えあれば憂いなし」、よく考え抜かれた災害対策が非常に大切。いざという時、人任せにはできない。日頃から、従業員の自主修繕技術を高めておく必要が

ある。さらに、自分たちの農場に合った修繕・改善対策でなくてはならない。常日頃の整備は、非常時を乗り切るために絶対身に付けなければいけない、大切な習慣」。

「危険性を回避する、または被害損失を最小限に止めるため、最も経済的・合理的な対策を講じる。これがベストか、もっとよい方法はないのか、マネジメントサイクル（PDCA cycle：plan（計画）、do（実行）、check（評価）、act（改善））を活用し、絶えず見極める必要がある」。

「災害時に現場で最も大切なのが豚の「医・食・住」を確保すること。医とは、SPF豚の能力を十分発揮させる健康管理であり、豚の発信するシグナルを見極めること。素早い、適切な判断・実行が不可欠。そのためには、日頃の安全管理・自己管理が基本となる。

食とは新鮮な飼料と水の確保と給与。停電復旧後の給餌器・飲水器の点検は重要。飲水は災害発生後2日以内に復旧させなければならない。農場では3タイプの水源を確保している。また、飼料タンクは揺れによるねじれを防ぐため柱の基礎を一体型にし、手給餌に備え直接タンクから飼料を取り出せるようにしておく。給餌ラインはリスク分散のため2系統、タンクとの接続には緩衝部分を設ける。挿入は豚舎に固定せず、傾斜を考慮し上下の長穴口にし、豚舎内ではチェーンで吊り下げ揺れを防止する、などの工夫をしている。

住とは最適な飼育環境と管理。豚の健康管理同様観察が大切で、不具合箇所の早期発見・早期対策が必要。



秦 政弘講師（協会副会長、(株)サンエスブリーディング社長）

このときの基本も『自分たちで直す』。さらに、なぜ破損したのか、原因を突き止め、今後破損しないように改善することが肝要。

豚舎の環境整備には、電気制御が不可欠で電気を確保しないと何もできない。自家発電装置は必須。緊急時稼働なのだから、定期点検は欠かせない。また、稼働燃料の備蓄方法と量も法的制約の範囲内で決めておく必要がある。また、停電復旧は予告なしなので、停電時は全ての遮断機をOFFに。停電復旧後、機器周辺の安全を確認してからONにする。また、耐震装置付きのガス器具も接続箇所が大切。配管の外れを想定しヒューズコックを取り付け、設置場所にも地震対策を施してある。今回、倒れたガスボンベはなかった。

「防疫対策の基本は関係者以外の立ち入りを認めないこと。認定規則の設備基準の機能をいかに迅速に復旧・復活させるかに尽きる」。

一など農場の対策を具体的にお話いただき、最後に「『災害は忘れたころに…』『喉元過ぎれば…』を忘れず、今回の経験から、いま何をしておくかを考えていただければ」と日頃の備えの大切さを強調されました。

休憩後、**生産成績最優秀CM農場の表彰式**が行なわれました。表彰農場は総合生産成績部門・商品化頭数部門ともに、**北海道の青木ピッグファーム**。同農場は総合生産成績で4年連続、商品化頭数でも3年連続受賞となりました。



表彰後挨拶する青木ピッグファームの青木サリアさん

式には代表の賢一さんに代わり奥様のサリアさんが出席、賞状とトロフィーが授与されました。

サリアさんは「主人は本当に豚の世話をよくやり、よく働きます。以前『豚と私とどちらが大事なの』と聞いたら『豚だ』と答えたので、腹が立ちました(笑)。今日も分娩予定の豚がいます。今は4人の子育て中なので大したことはできませんが、主人の努力に私も力を添えていきたいと思っています」と挨拶されました。ゆったりと明るく元気で、とても素敵なお方でした。同農場では新しく若い従業員を採用し、増頭に意欲を燃



左からコーディネータの赤池洋二協会最高顧問、パネリストの大泉俊昭・石川輝芳・明石 徹・秦 政弘・川島 力の各氏。

やしているそうです。

最後は「**東日本大震災の体験を活かして**」をテーマに**パネルディスカッション**が行なわれました。パネリストは大泉俊昭(岩手・農)八幡平ファーム)、石川輝芳(宮城・農)しわひめスワイン)、明石 徹(宮城・株シムコ岩出山事業所)、秦 政弘(宮城・サンエス丸森農場)、川島 力(福島・株ユキザワ玉川農場)の5氏。それぞれ被害状況などお話をいただきました。

震災による被害状況は農場により大分異なりましたが、津波の被害こそなかったものの、停電、交通網の寸断、飼料および燃料確保の困難さ、情報収集手段の喪失等が大きな問題となりました。また、余震が何度も起こり、人々の不安も助長されました。

厳しい経験をされたパネリストが異口同音に言われたのが、従業員の献身的な行動でした。大多数の人が農場に泊まり込み、豚の世話と復旧に取り組まれたとのことでした。震災当時、現地は寒波がぶり返し、その苦労たるや大変なものだったと思います。飼料給与では「母豚を助け、肉豚は捨てる」という究極の判断をした農場もあったという事実が、当時の切迫した状況を如実に物語っています。また、停電時に大変だったのは、コンポストと浄化槽の継続運転だったようです。大きな社会的責任を伴うところでもあり、日頃から停電を想定した対策が大切だと思われます。

さらに、各農場が苦労されていたのがSPF豚認定農場としての防疫対策です。風呂・シャワーをどうするか。場内用作業着の予備の確保。豚舎の洗浄・消毒はどうか。対策の重要性を再認識するきっかけとなったといえそうです。

大腸菌による新生期下痢②

東京農業大学教授 山本 孝史

対 策

飼育環境の改善

本病は、新生豚がETEC（腸管毒素原性大腸菌）で汚染された床や母豚の皮膚から感染することにより発病する疾病ですので、飼育環境に存在するETECの数を可能な限り減らすことが重要です。そのためには分娩前に分娩豚房の洗浄・乾燥を十分に行ったあと消毒します。消毒薬の効果は有機物が存在すると大幅に低下しますので（第42号参照）、消毒前の洗浄・乾燥は、糞便の残骸が全く目視できなくなるまで念入りに実施します。そして分娩時はもちろんのことそれ以後も新生豚が母豚の糞便と接触しないようにします。分娩クレートが長すぎると汚染の機会が増えるので、母豚の大きさに応じて変えられるものが理想的です。また周囲の床面より高く、糞便を容易に落下させ得るメッシュの床の方がコンクリートよりも発病率が低いとされています。新生豚には初乳を十分与えるとともに保温に留意します。新生豚の至適温度（30～34℃）と母豚のそれ（22℃）は大きく異なりますので、新生豚は保温箱を利用し環境温度は上げすぎないようにします。母豚が暑がるようだと思えば水を周囲にまき散らすので周囲が湿潤となり、ETECが増殖しやすくなってしまいます。このようにして飼育環境をいかに衛生的に保つかが本病を予防する最大のポイントであり、ワクチンは次善の対策です。原因となるETECには市販のワクチンが無効な線毛を持った菌株もあるからです。

ワクチン

本病の原因となるETECは、菌体表面の線毛によって小腸粘膜に付着、定着して増殖しますが、線毛に対する抗体が存在すると付着できなくなります。そこで母豚を免疫して線毛に対する抗体を作らせておき、この

抗体を子豚に移行させて定着を防ぐのが本病に対するワクチンの目的です。線毛には抗原性が異なる多くの種類があります。新生期下痢の原因となるETECが保有する線毛は、F4 (K88), F5 (K99), F6 (987P), F41などですが、F4保有株が最も多く分離されています。ワクチンは2社から市販されており、1社はF4およびF5、他の1社のワクチンはさらに987P保有株が含まれています。いずれも妊娠中に2回免疫して十分に抗体価を上げておきます。本病のワクチンの効果は、母豚からの移行抗体により得られるものですので、分娩後速やかに初乳を十分摂取させることが重要です。

治 療

下痢が認められたら、直ちに原因菌の特定と分離された菌株の薬剤感受性を実施して有効な薬剤を投与します。アンピシリン、ゲンタマイシン、アプラマイシン、オキシテトラサイクリン、オキシリン酸、ピコザマイシン、エンロフロキサシン、サルファ剤・トリメトプリム配合剤等が有効ですが、大腸菌は、各種の抗菌剤に対する耐性菌の割合が高いことが知られていますので、できるだけ早期に薬剤感受性試験を実施して有効薬剤を見いだす必要があります。わが国で分離されたETECの薬剤感受性に関する全国的な調査成績はありませんが、それに代わりうるものとして、Haradaら（2005）は、何らかの大腸菌症に罹患した豚から分離された大腸菌118株のうち、耐性菌の割合はアミノペニシリン：44.1%、ジヒドロストレプトマイシン：66.9%、ゲンタマイシン：14.4%、オキシテトラサイクリン：80.5%、ピコザマイシン：7.6%、エンロフロキサシン：11.9%、トリメトプリム：43.2%であり、健康豚由来株よりも高率であったことを報告しています。

<参考文献>

Harada, K., Asai, T., Kojima, A., Oda, C., Ishihara, K., and Tkakashi, T. (2005). J. Vet. Med. Sci., 67, 999-1003.

ネズミの防除と殺鼠剤

イカリ消毒(株)技術研究所 春成 常仁

殺鼠剤について

畜舎で殺鼠剤を使用する場合、家畜の二次中毒を防止するために殺鼠剤の飛散防止や使用する場所の制限を行います。使用する殺鼠剤は動物用医薬部外品の登録を受けたものを選択します。

殺鼠剤の種類

殺鼠剤には大きく分けて急性毒殺鼠剤と抗凝血性殺鼠剤があり、その作用は大きく異なります。主に、畜舎で使用される殺鼠剤は抗凝血性殺鼠剤です。抗凝血性殺鼠剤は比較的毒性が低く、飼育動物への安全性の問題から広く使用されています。

急性毒殺鼠剤

現在流通している主な急性毒殺鼠剤にはリン化亜鉛があります。リン化亜鉛はネズミの体内に摂取されると胃液と反応し、有毒なリン化水素を発生させ死に至らしめます。利点は、一度の摂食で効果があることと、摂取されたリン化亜鉛は分解されてしまうので、殺鼠剤を食べたネズミを豚が食べることによって起こる二次中毒の心配がありません。しかし、欠点として忌避性が強く食べさせるまでに時間がかかることや、豚が誤って食べた場合に同様の作用を引き起こすことも考えられます。

抗凝血性殺鼠剤

抗凝血性殺鼠剤は数日間の連続した摂取により、血液凝固に関わる因子の働きを止め、体腔や皮下組織などに浸潤性の出血を引き起こします。そのため、仮に飼育中の豚が誤食しても少量では連続摂取しない限り、中毒になりません。また、ビタミンKの投与により症状が回復するため、急性毒に比べて安全性が高いとされています。

抗凝血殺鼠剤はワルファリンなどの第一世代とブロマジオロンなどの第二世代に大分されます。第一世代に比べて第二世代は体内で分解されにくいいため、1回の摂取で防除効果を上げることができます。

殺鼠剤選択と配置のポイント

殺鼠剤による防除で効果を上げるにはネズミに殺鼠剤を食べさせる工夫が必要になります。殺鼠剤を配置する場所はネズミの生息痕跡(糞やラットサイン)がある周辺に設定します。その際、豚が誤食するのを防止するため、飼育している周辺の設置は避け、ベイトボックスを利用します。また、ドブネズミを対象とした場合、外周の土に鼠穴を作って生息している事があるため、防水処理されているブロックタイプを利用します。

殺鼠剤によっては餌を混ぜて使用するタイプがあります。基剤に使用する餌は数種類用意し、最もよく食べた餌を用いて殺鼠剤を調整すると喫食量が多くなります。その際、ネズミが好む餌として種子類、小麦粉、穀物類を用います。殺鼠剤の成分は濃度が高くなると忌避性があるものが多いため、用法用量に従って正確な濃度に調整します。また、畜舎内に豚の餌が散乱しているとネズミは効率よく殺鼠剤を食べてくれません。豚の餌は密閉した容器で保管し、掃除の頻度を上げて殺鼠剤を効率よく食べる環境整備が必要になります。

ワルファリン抵抗性ネズミの出現

ワルファリンは畜舎で広く使用されていますが、これを食べても死なないネズミ(スーパーラット)の存在が問題になっています。以前は都市部のクマネズミに抵抗性が確認されていましたが、近年では畜舎においてドブネズミ、クマネズミのワルファリン抵抗性個体が報告されています。対策としては第二世代殺鼠剤の使用や作用機序の異なるリン化亜鉛等の殺鼠剤の使用が挙げられます。また、殺鼠剤だけに頼らず、環境整備や捕獲を並行して行うことも重要です。

<参考文献>

ネズミ駆除協議会(2006)家ネズミ用語辞典、ネズミ駆除協議会、田中生男(1992)ネズミとその駆除、(財)日本環境衛生センター、谷川 力(2006)安心して住めるネズミのいない家、講談社、谷川 力(2007)有害生物防除事典、オーム社、養豚の友9月号(2010)日本畜産振興会

ト◆ピ◆ツ◆ク◆ス

ちくさんフードフェア、2度目の出展も大盛況 SPFポークしゃぶしゃぶの試食に来場者殺到

前号でもお知らせしましたが、協会では昨年10月8日(土)、9日(日)、神奈川県川崎市東扇島の(財)日本食肉流通センター内で開催された「ちくさんフードフェア」(川崎みなと祭りと同時開催)に出展しました。

三年前に続く二度目の出展となった今回のフェアは30周年の節目の開催となりました。好天に恵まれた中、川崎みなと祭りととの連携強化や、「がんばろう！東北応援フェア」などのイベントが盛り上がりを見せ、例年を大きく上回る11万8,000人の来場者となりました。

協会ではSPFポークのしゃぶしゃぶの試食を行ない、アンケートに回答した人に協会オリジナルTシャツが当たる抽選会などを実施しました。また、パネルの展示、協会や認定農場のパンフレットおよびSPFポークリーフレットの配付、会場近郊の販売店の情報提供などを行ないました。

両日も協会ブース前には長蛇の列ができ、来場者が殺到。試食用の資材が先になくなるほどで、準備し

た45kgのSPFバラ肉が、予想を上回るペースで試食完了しました。

またアンケートでは、年代別のSPFポークの認知度等、貴重なデータを集めることができました。今後の普及・促進

に役立てていきたいと思っております。お手伝いいただいたピラミッドの皆さんのご協力に感謝申し上げます。



試食を待つ協会ブース前の長蛇の列(上)
試食のしゃぶしゃぶを振る舞うスタッフ(下)

ト◆ピ◆ツ◆ク◆ス

柏崎SPF豚農場認定委員長が 養豚功労賞を受賞

協会SPF豚農場認定委員会の柏崎守認定委員長が、昨年秋、日本養豚学会の第5回養豚功労賞を受賞されました。

この賞は「養豚に関する貢献、養豚産業に対する貢献が顕著な会員に贈られるもので、協会関係者では平成20年の赤池洋二・前協会会長につづく2人目の受賞となります。本来、同年3月に開催予定だった大会が東日本大震災直後ということで中止となり、秋の大会における表彰に持ち越されました。

10月15日(土)、東京農業大学厚木キャンパス(神奈川県厚木市)で行なわれた養豚学会大会の総会后、表彰式が執り行われ、柏崎委員長が表彰状と副賞の豚のブロンズ像を授与されました。

受賞後、柏崎委員長は挨拶で「話せと言われればい

くらでもお話しすることはありますが」と会場を笑いに誘い、「平成22年に発生した口蹄疫や震災の被害により廃業を余儀

なくされた生産者もいる。日本の養豚はアジアでトップクラスだが、他の国の追い上げも厳しい。生き残るためには学会も主導性を発揮していかなければならない。今回の受賞を大変重く受けとめている。日本の養豚のために今後がんばりたい」と挨拶されました。



表彰後挨拶する柏崎守認定委員長

SPF豚肉の八幡巻き

●レシピ提供・「ワイン懐石 囃 shiya」オーナーシェフ 林 マサル（東京都中央区）

今回レシピをご提供くださったのは連載当初にレシピをご担当いただいた林シェフ。現在は東京・銀座でワインと食材にこだわった斬新な懐石料理のお店を運営されています。おせち料理の定番の豚肉版を教えていただきました。

●材料●

SPF豚バラスライス 20~30枚
さやいんげん 20~30本
サラダ油 適量

<A>

しょうゆ 2分の1カップ
酒 大さじ4
みりん 大さじ4
砂糖 小さじ4



●つくり方●

- ① さやいんげんはヘタを落として、下ゆでしておきます。
- ② 豚肉を広げ少しずつ重ねて、いんげんを芯にしてはじからくるくと巻き付けていきます。
- ③ フライパンに油を熱し、②を巻き終わりを下にして焼いていき、肉に火が通ったら一旦取り出します。
- ④ 同じフライパンにAの調味料を入れて煮立たせます。
- ⑤ ③を戻して煮からめます。全体にたれがからんだら出来上がりです。
- ⑥ 少し冷ましてから、食べやすい大きさに切って盛り付けます。

【林シェフからひとこと】

おせち料理でおなじみの牛肉の八幡巻を豚肉でアレンジしてみました。焼くときにはお目を下にすると、バラバラになりにくくなります。

●認定情報●

●平成23年度認定農場

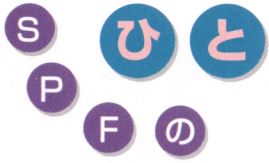
[12月認定]

(有効期間:平成23年12月8日から24年12月末日まで)

北海道・ホクレン滝川スワインステーション種豚センター、(有)道南アグロ、富良野スワインファーム(有)、(有)山中畜産千歳農場、(有)中多寄農場、(有)サクセス森、青森県・(有)ふなばやし農産、同第3農場、神明畜産(株)八戸ファーム、岩手県・(有)ケイアイファウム玉山農場、斉藤SPF農場、(有)胆沢養豚、カワムラSPFファーム、北日本JA畜産(株)本社農場、秋田県・(有)ポークランド、山形県・(有)最上川ファーム、(有)鮭川ピッグファーム、宮城県・(株)しまざき牧場蔵王高原農場、(農)しわひめスワイン、福島県・神明畜産(株)川内ファーム、(株)ユキザワ玉川農場、茨城県・(有)常陸牧場、(有)澤畑養豚センター、群馬県・(有)長谷井畜産、ピックファームゴ

カン、利根沼田ドリームファーム(株)、千葉県・実川養豚、綱島良信養豚場、高森養豚場、小長谷養豚場、(有)菅井物産SPF農場、長野県・(有)ヤマイチファーム、岡山県・岡山JA畜産(株)吉備農場、(有)エム・ピー・エフやなはら、愛媛県・(株)ユキザワ大川農場、(株)ユキザワ丹原農場、大分県・(株)北九州ジェイエイ畜産大分SPF豚種豚農場、(株)北九州ジェイエイ畜産大分支社SEW安岐ファーム、長崎県・(有)芳寿牧場口之津農場、同国見農場、同島原農場、同新島原農場、(有)エス・イー・ダブリュー大西海ファーム、宮崎県・江夏商事(株)夏尾農場、(有)ナガトモ、鹿児島県・(有)サツマ湧水事業部栗野農場、(株)シムコ阿久根事業所、そお元気ファーム(株)持留農場、同久保崎農場 (以上49農場)

※次回認定委員会は平成24年3月8日(木)の予定



飯田養豚
飯田 伴雄さん
●千葉県東庄町

東庄SPF研究会の 次世代のまとめ役

関東有数の河川・利根川に接し、自然豊かな千葉県東庄町。[イチゴ街道]と呼ばれる国道356号線沿いは、週末には家族連れや観光客が訪れ、イチゴ狩りなどで賑わっています。東庄町の特産品として知られる「東の匠SPF豚」は、東庄SPF豚研究会に参加している10農場によって生産されていて、飯田養豚もメンバーの一人です。

伴雄さんは父文雄さんの後継者。伴雄さんは、特殊精密機械の製造メーカーに勤務されていましたが、数年前から農場での仕事に就きました。以前の仕事と農場での仕事はあまり関係がないとも思われますが、電気システムの修理や浄化槽を設計する際、色々使いやすいようにアドバイスできるなど役立つところがあるといえます。中でも、プラスマイナス1mmの誤差も許されない精密機器製造を通じて、安定した品質管理の大事さを体験したことは、養豚にも通ずるところがあるそうです。より一層安定した品質の豚肉を定量生産するためにどうするべきか日々精進中です。そのためのこだわりを聞いたところ、「投薬は最小限に抑えるようにすること。飼料も良いものを選ぶこと」。

また、大事にしているのが人との繋がり。農業系の学校を卒業されたのですが、何か集まりがあると先輩や後輩、同期に出会い、業種は違っててもためになる話



飯田伴雄さん(右)とお父さんの文雄さん

が多く勉強になり、いい刺激になるとのことです。

東庄SPF豚研究会には青年部があり、後継者が多数所属。定期的に勉強会を開催、意見交換をしています。後継者といっても40歳前後から10代まで幅広く、まとめ役である伴雄さんは「年齢層が広いので価値観の違いに折り合いを付けなければならない。幸いみんなが色々意見をを出してくれるから助かります。青年部ならではの活発さを生かして、父親達の代に負けないグループにしなきゃいけない」と目標は明確です。

中でも力を入れているのは、「東の匠SPF豚」のPR活動。地元のお祭り(ファンには堪らない「東庄町ラジコン航空ショー」など)から東京で行われる大きなイベントまで、積極的に参加しています。「イベントは人との繋がりができるチャンス。若手がチャンスを生かして多くのことを学び、お互いに刺激し合い成長していけるのがこのグループの強みです」と話す姿は弟妹を見守る、頼れるお兄ちゃん。

お兄ちゃんと弟妹たちの活躍で、全国に「東の匠SPF豚」の名が鳴り響く日も近いかもしれません。

(株)シムコ 仲田 誠

編集後記

新年明けましておめでとうございます。「一年の計は元旦にあり」といわれます。今年は生産力と品質を向上させ、コストを低減し、世界の養豚生産者と互角以上の競争力をつけたいですね。そのためには自農場で何が足りないのか、何から始めなければいけないのか、ターゲットを明確にしておくことが大切です。また、今号の提言にもありますが、これからの生産者は消費者の健康を守る意識も強く持たなくては行けない時代になるでしょう。自分たちの育てたSPFポークを「おいしい」と、誰が食べてくれるかにも関心を持つことで、視点を変え新しい取り組みも見えてくると思います。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール
このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより
第46号 2012年1月1日発行(季刊)
発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail : j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀